

主体性を育むテストについて

3年1組 6番 植田晴香
3年1組 16番 中田遥崇
3年2組 30番 山村伊吹
3年3組 13番 小暮美織

Keyword: 「教育」「テスト」「主体性」「学生」「グローバル」

1. はじめに

ChatGPTなどの情報技術の発達により、現在、存在する職業の約49%がAIに取って代わると言われている。このような状況下で、個々の理想の人生を実現するためには、単純作業ではなく主体的な行動が求められていくと考えられ、プレゼンテーションやグループディスカッションなど、主体性を育てるとされる授業形態が推進されている。その動きとして、2022年度から文部科学省は、単元テスト制を採用することを発表した。私たちは、定期テストから単元テストに移行してどのような効果が得られたのか。このテスト制度に焦点を当て、探究することにした。現代社会において、主体的な学びに必要な制度とは何なのか？教育を受けている身である私たちの目線で中国、韓国、米国の3カ国の教育制度を比べ、日本の教育を見つめ直すことにした。

2. 序論

(目的)グローバル化とテクノロジーの発達に伴い、日本の教育は世界の様々な制度を取り入れてきた。そして国際高校では2022年度から、奈良県内の他校より早い単元テストの導入が行われた。私たちは、この単元テストでは生徒の主体性が育たないのではないか、という仮説を元に、以前行われていた定期テストと単元テストを比べ、どのような変化が見られるのか、単元テスト制になり、生徒の意識はどのように変化したのかという問いを立てた。その探求の中で、創造力、行動力、主体性を向上させるための方法を探し、どのような勉強方法が効果的であるのか、またどのように情報技術を上手く使用していくかを他国の制度と比較し、調べ、発信し、伝えていくことを目的とする。

(方法)そこで我々は定期テストと単元テストの両方を高校で体験した105人の国際生と教師にアンケートを取り、現状やテストに対する意識などについて問いかけた。アンケートの内容は次のとおりである：

設問1、定期テストと単元テストではどちらの方が学力が身についていると感じるか

設問2、設問1で答えた理由

設問3、今後、テスト制がどうなって欲しいか

先行研究として、国立青少年教育機構が高校生を対象に行った「勉強と生活に関する意識調査」を挙げる。平成28年(2016)に行われたこの調査では、現在の高校生たちの進路と将来の職業対しどのように考えているかや、高校生の職業観や将来の進路希望、進路に向けての準備などについて、日本、米国、中国、韓国の4カ国を比較している。

3. 本論

I、アンケートの結果より

国際高校生105人を対象としたテスト制度に関するアンケートでは、いくつかの傾向を発見できた。まず、設問1「単元テストと定期テストではどちらの方が学力が身についていると感じるか」に対しては、定期テストと回答した生徒は約47%、そして単元テストと回答した生徒は約53%であった。この結果から、近年導入された単元テスト制では、約半数の生徒が学力が身につけやすいと考えていると同時に、力がつかないと答えた人も半数程度いることもわかった。

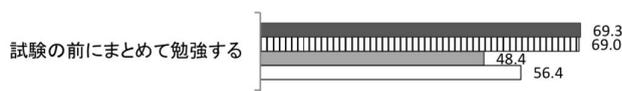
最初に、単元テストの方が学力が身につくと感じている生徒が挙げた主な理由は、範囲が狭く勉強しやすい、継続的に学習が出来る、そして、点を取りやすい、の三つである。一度に覚える範囲が狭いため、テスト勉強に対するハードルが下がり勉強しやすい上に、単元テスト制では行われるテストの回数が多いため、テストを意識した勉強がその都度出来るようになったというものであった。そして簡単で点を取りやすいという意見としては、テスト範囲が狭く難易度の高い問題が少ないため、高い点数を取り続けることが容易であると回答した生徒が多かった。

それに対して、単元テストで学力が身についていないと感じる理由は、一貫して勉強時間の確保が難しいというものであった。一番多かった意見は、複数のテストが重なるため負担が大き、というものだ。本来、学期に2回の考査が行われていたのに対し、単元テスト制では単元に分けて考査を行うため、実質テストの実施回数が増えている。特に、学期の折り返し地点や学期末には単元テストが重なるが、定期テスト時のように「テスト週間」がなく、授業が通常時間なので、勉強時間の確保が難しいと感じている生徒が多い。次に多く挙げられたのは、一夜漬けが増えたという点である。これは三番目に挙げられた、部活との両立が大変であるという意見と、テストの負担と深く関係している。通常授業と部活の後に複数の教科の勉強をする時間が確保しにくく、多くの教科が一夜漬けになってしまうという理由であった。また、学期に2回しかない定期考査と比べ、複数回ある単元テストでは緊張感が薄れるため、低い点数を取ることに抵抗を感じにくくなったとの意見も多々あった。

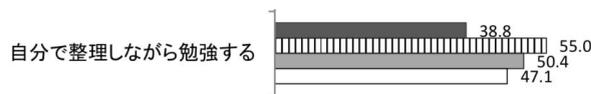
これらを踏まえ、私たちは新しく導入された単元テストには二つの問題点があると考えた。①単元テストは簡単だから点を取りやすいという意識、そして、②一夜漬けが増えた点である。これらの問題はそれぞれ密接に関係している。定期テストより範囲が狭く内容が簡単だからと前日に勉強をしても高得点が取れることから結果的に一夜漬けが増えた学生が多い。また、単元テストは継続した学習を促すという長所があるが、次に控えるテストのため勉強を続けているだけなら悪循環になりかねない。複数のテストがある状態が続くと、多くの生徒は次のテスト勉強に集中するため、受けたテストや授業の内容を復習する時間を確保しにくい。よって、基礎知識を短期記憶に留めるばかりになってしまうという可能性があるからだ。これらの結果から今の単元テスト制では、そのときだけのテスト勉強は継続できているけれど、長期的な勉強は継続できていない人が多いことがわかった。

II、国立青年教育振興機構の結果より

・ 国立青年教育振興機構での調査の結果から見てみると、私たちが気になった点は一夜漬けの割合である。結果から「試験の前にまとめて勉強すること」について日本は69.3%、米国は69.0%、中国48.4%、韓国は56.4%になっており、日本が最も多い。(上から日本、米国、中国、韓国)



・一方で、「自分で整理しながら勉強するかどうか」、という質問に対しては、日本は38.8%、米国は55.0%、中国は50.4%、韓国は47.1%という結果になっている。(上から日本、米国、中国、韓国)



・また勉強の時間、学校の宿題とそれ以外の勉強を「しない」という回答は日本は24.2%、米国は17.7%、中国は7.6%、韓国は9.8%になっており、日本は米国、中国、韓国に比べて高いことが読み取れる。

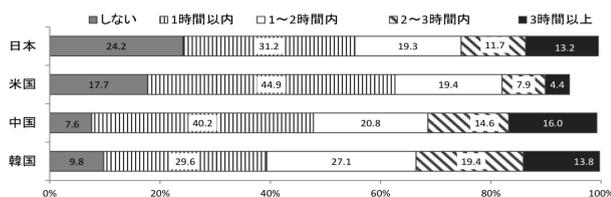
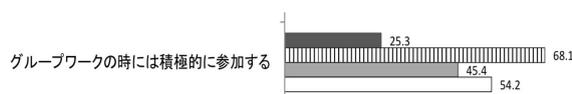


図3 平日に学校の授業と宿題以外に、どのくらい勉強しますか(塾なども含む)

・そして主体性の面で、日本は勉強の態度が消極的である。日本では授業中にノートをしっかりとするが、発言やグループワークへの参加に消極的である。「グループワークの時には積極的に参加する」という内容の回答では日本は25.3%、米国68.1%、中国は45.4%、韓国は54.2%という結果になっている。(上から日本、米国、中国、韓国)



・日本の高校生は、「教科書に従って、その内容を覚える授業」(図1)が多いと感じている反面、いろいろな教材や情報を活用し、生徒個人やグループで調べる授業やアウトプットの機会が少ないと感じている。(図2)(上から日本、米国、中国、韓国)

図1

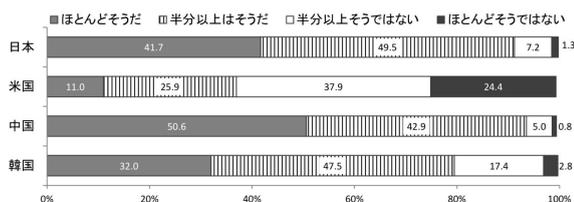


図4 教科書に従って、その内容を覚える授業

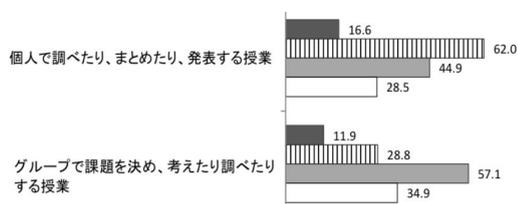


図2

3、考察

これらの調査から、日本は他国と比べ、グループワークや主体的に自ら取り組む活動が少ないと考えられる。また新しく導入された単元テストには、計画的に勉強をする習慣が付きにくいことや、短期記憶の知識ばかりが付きやすいなどの問題点がいくつかみられた。そのため、今の単

元テスト制では、そのときだけのテスト勉強は継続できているけれど、長期的な勉強は継続できていない人が多いことがわかった。これらのアンケートの情報を踏まえて複数の先生方とも話し合い、改善すべき点や単元テストのあるべき姿について話し合った。話し合いの結果、一番良いテストの方法は教科によって違うため、「これが良い」と一概には言えない、という結論になった。単元テスト制という形で新たな制度が導入されたが、教科によっては定期テストと同じ方法をとっている場合もあり、多種多様だ。そのため、現時点で私たちに必要なことは、テストに対して意見を言いやすい環境と、柔軟に対応できるような学習のリソースなのではないかと考えた。

そこで私たちは、単元テストの性質上、長期的な勉強を課せられる機会がないため、長期的勉強をする際に役に立つ情報を発信することにした。月に一回を目安に、英単語帳の比較や、数学や世界史、日本史などの参考書の情報を、紙とデータを使って発信している。第一回として、私たちは昇降口に世界史に関するポスターを貼り、勉強に対する意識の向上や、長期的学習の促進に努めた。

4. まとめ

結論として私たちは、単元テスト自体が生徒の主体性を育てるのではなく、その制度をどのように活用するかが重要であると考えた。その際、単元テストの比較的容易であり、一夜漬けが増えってしまうという短所を補う制度や、定期テストのような緊張感を要するテストの機会を設けることが必要であると考えた。これから単元テスト制が日本全国で広がっていくと思うが、生徒が自ら制度に疑問を持ち、主体的に改善をしていく活動や、学習に関する情報を発信していく活動が求められるのではと考えた。

5. 参考文献・出典

国立青少年教育振興機構「体験の風をおこそう」運動 “高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書(概要)—日本・米国・中国・韓国の比較—”(2023,10,30)

<https://koueki.net/user/niye/110342003-1.pdf>